

折角の雪

能村 研三

掌中の珠

色尽し果てたる紅葉雨を待つ

ひと雨のありて杉山紅葉山

雪吊に折角の雪授かれり

吾のたてし音にたちろぐ霜夜かな

のし餅を切る役失せて家長たり

省略の過ぎしと思ふ裸木よ

惜しむべき年ならねども年惜しむ

謀りごとめきたる鮫鱧鍋囲む

したたかに時疫を抜けて年送る

禅林の青竹伐るも年用意

昨年の暮、やっと原稿も一段落したので、コロナ禍でのまたとない巣籠りの期間を使って、書庫の整理にとりかかった。私の書庫は書斎の奥の部屋で、階下の第一書庫には主に先師登四郎の蔵書、第二書庫に「沖」関係の図書が収蔵されている。どこの書庫も足の踏み場もなく、床に平積みで置かれる本もたくさんある状況であった。

昔、林翔先生の書斎にお邪魔したことがある。先生は整理の達人で、五十音別に著者ごとの句集を並べ、どんな時でも必要な本が取り出せるように整理されていた。だからと言ってそんな整理の仕方はすぐにできる筈もないので、今回は簡単に大方の片づけをして、次の機会を待つことにした。

この他に、登四郎が昔から大事にしていた軸や額、色紙、短冊など、あちらこちらに分散されて置かれていたものを一堂に集め、それぞれに番号を付して台帳に索引を作り、その内容を記すことにした。

その折、かつてから探していた軸がみつかった。それは登四郎が俳句の手ほどきを受けた伯父山本六丁子（曾良の随行日記を発見した人）の遺品として譲り受けた「曾良の軸」である。

曾良の筆による色紙の軸で、見事な朱色のもので「奥の細道」の象潟の一節「北海の荒磯に…」という文があつて「波越えぬちぎりありてやみさこの巣」という句が美しく書かれている。

もう一つ登四郎が大事にしていたものに「笠翁の芭蕉像」がある。これは芭蕉門の一人で俳人であり漆芸家の小川破笠（おがわはりつ）の作によるもので、面長な顔は素焼のまま、眉は太く秀でてしずかな威厳に満ちた芭蕉の像で、三十六体造られたものの一つと言われる。

今年に登四郎生誕百年、没後二十年でもあることから、このたび見つけたものも何かの機会に公開していきたいと考えている。

能村 研三